あいえる大忘年会

１２月２０日に、平成最後の忘年会を行いました。
各部署がこの日のために準備した出し物を披露し、平成最後にふさわしい盛り上がりとなりました。

ウィル　ダンス

昼食

ライフ　ハンドベル

ほんわか　歌クイズ

ピア・エンジン　紙芝居

あいえる　ファッションショー

あいえるらくがき帳２００号達成記念

２００号記念特集　らくがき帳の足跡

あいえるらくがき帳は、今号を以て、通算２００号となりました。
それを記念して、創刊から現在までのらくがき帳の歴史を、当時の記事から抜粋しつつ紹介いたします。

●創刊号発刊

・現在の「あいえるらくがき帳」は**発刊当初「施設らくがき帳」という名称だった。**
「施設の障害者・外出ネットワーク」がボランティアさんを集めて活動を始めたのは、１９８９年９月。**通信の創刊は、その１年後の１９９０年８月。創刊号の名称は、「施設障害者の交流紙（仮名）」。**そこから施設の会員の方々に名称を募り、９１年１月の第３号から「施設らくがき帳」となりました。
※名称候補は、６つあがり、外出オリエンテーション（料理作り）の時の参加者による人気投票によって決まる。

・発刊当初は、２ヶ月に一回の発刊でしたが、**９２年４月(第１１号)から毎月発刊**となる。理由は、①外出の内容の豊富化をめざし、オリエンテーションをきめ細かく開催していくために利用者の皆さんへのお知らせもそれに合わせていかなければならなくなった事、②「ウイル作業所」の活動報告のページを新設し「外出サービス」と「ウィル作業所」が共同で「施設らくがき帳」を発行していくことになった為。
これに伴って**年間購読料を６００円から１２００円に変更。**但し、施設障害者会員及び介助者会員についてはこれまでどおり無料。

●発刊の趣旨

「この通信は、施設障害者のために施設障害者が作り上げていくものとして始めました」
できるだけ施設当事者の声を掲載しようと、声を集める。施設では、入所者以外との交流はほとんどありませんでしたので、通信を通して施設間の交流を図ろうとした。

●施設入所者の投稿

当事者からの声の内容としては、「外出の感想」「自己紹介・自分史」「施設生活の紹介（日課や年間行事等）」「ペンフレンド求む」「俳句」等々
投稿された方々の施設は、くまとり弥栄園、光園、自彊館・今宮寮、エフォール、わらしべ園、福泉療護園、府立身障センター、四天王寺悲田富田林園、大阪市更生療育センター、希望の園、くりのみ寮、岸和田光生療護園等

投稿例　　**わたしの小人生（９１年３月　第４号より）**

わたしは、生まれつきの脳性小児麻痺です。１９３３年に滋賀県の大津市で生まれました。未熟児で生まれた私は、強いおうだんにかかり、母乳を飲む力がないので牛乳や山羊の乳で育てられました。

私の教育は、両親と八つ年上の叔父がしてくれました。それから、１１歳の春に小学校（国民学校）３年に編入させてもらい、１学期半ほど母におぶわれて通いました。それまでに、一つ年下の妹が小学校に入学する時と同じように教科書、筆箱、クレヨン、下履き、ノート等学校用具一式をそろえてくれました。

父は、訓練をかねて、私をよく外に連れて行ってくれました。毎週のように京都、奈良、大阪の山や湖に、また父の背中で凧をあげたこと、谷川でかにや魚を捕ったことは、良い思い出です。

私は、乗り物は旅客機以外なんでも乗っています。

その父も１９４４年にサイパンで戦死しました。海軍の軍人でしたから。

その後、母は私を頭に４人兄弟を育てるのに忙しく、私のことをかまってくれなくなりました。それからは毎日が悪戦苦闘の連続でした。

●紙上年賀（９１年１月　第３号より）

紙上年賀の趣旨文

「施設らくがき帳」は、施設障害者のまだまだ不充分な個人外出ではできにくい施設間や、施設と地域との交流を紙面を通して深めていこうとして発刊しました。

編集部では、この意図を具体化するため新年（第３号）に全員参加の紙上年賀を企画しました。施設障害者・介助者会員の方々はもちろん、施設の園長先生、地域で生活－活動されている障害者・諸団体の知りうる範囲で”あいさつ文”の依頼をお願いしました。私達は、これを機にここに紹介した人達との情報交換－協力関係を深め、「外出サービス」の新たな地平を築いていきたいと考えています。

言葉を寄せてくれた方々；施設長（６）、団体からのメッセージ（１３）、個人（１０）施設入所者（２２）、ボランティア・スタッフ（２８）合計８１名。

●外出サービスの状況報告（外出者数や外出先、感想等の紹介）

９１年１月外出者数２０名（介助者２６名）、２月外出者数１９名（介助者２３名）
行き先；
友人の結婚式へ出席、梅田コマ劇場、難波グランド花月、滋賀県のいとこに会いに、グループホームの活動へに参加、梅田ヒルトンホテルでケーキバイキング、梅田、難波への買い物・映画等

９２年２月外出者数３３名（介助者４２名）、３月外出者数３４名（介助者４０名）
行き先；

オリエンテーション（くまとり弥栄園訪問）、京都市美術館、なんば花月、NHK見学、京都で友人と会う、京都嵯峨野散策、京都動物園、天王寺動物園、いとこ宅へ訪問、他施設の友人を訪問等

僕って子供？（自彊館・今宮寮　HY）９１年１月　第３号　外出感想文より

１１月１８日、外出サービスで僕は映画館へ行きました。僕の介助者は、もちろん一度も会ったこともない人でした。一人は若い人で、もう一人はご年配の人でした。最初寮（施設）から外出の手続きを終えて、門から出て、いきなりご年配の方は、慣れていないので運動不足の為に助けてくださいと言われて、僕は始めドキッとしました。僕はその人に話しかけようとしましたが、若い人ばかり話してしまうので思う事が言えず映画館に行きました。

映画館には、階段があってなかなか降りられませんでした。僕はボランティアに通行人の人に助けを求めたらいいと言いましたが、二人の介助者は別にいいからと言われて少し驚きました。

最初から最後まで、まるで子供扱いされた僕でした。

ボランティアさんからの投稿　９１年１１月　第８号より

気づいた点として、障害者本人の自立のための外出介助でありながら、ショッピング、食事等、対応する人（総じて親切な人が多い）が要件を介助者に話しかける場合が多く、障害者の方を一人前と見ていないような気がして、少し複雑な気持ちになります。（もっとも意志疎通が難しい場合もあり、やむを得ないときもありますが）このことは、施設の面の不備と合わせて、車いすの外出がいかに特別なことであり、今まで人目にあまり触れられることもなく、日常的な行動では無かったかの証明のように感じられます。そのことは私自身、いままでの外出介助の中で、「さあ、車いすで出発だ」という少し負った気持ちがあったのを否定できないからです。なんの気負いもなく、ごく自然にどこへでも車いすで外出ができるようになるのが理想ですが、これは、車いすでの外出という、あえて人目に触れるような行動を通して、社会への積極的な参加を勧めていくことで、ひいては、街の施設面での改善にもつながり、また、障害者への理解も深まる事と思います。実際に車いすの方と外出すると、今まで見えなかったもの（人の親切心、あるいは特別の視線、また施設面での不備等）が見えてくるような気がします。

ボランティアさんからの投稿　（９２年１１月　第１８号より）

～困ること－金を持たずにでかけること

ある施設の人＝Ｂさんの外出介助を手伝う。出かける前、「忘れ物ないですか？」と声をかけた。Ｂさんは「はい」と応え、いざ出発。駅へ向かう途中、車いすを押していた私「むこうでどうするんですか？」と尋ねる。「映画を見たい」「どんな映画かね？」「・・・・？」（しばし沈黙）話はとぎれ、そうこうしていると「駅」に着いた。

「介助者の分も入れて２２０円ですね？」と言った私はＢさんにお金を求める。Ｂさん、財布よりお金を出そうとするも出てこない。のぞき込む私。「・・・？！」ない。財布のどこをさがせど、小銭の１円玉だけ。ガクーン。

結局、その日は一緒に外出された障害者からＢさんはお金を借り、事なきを得て終わった。これからも、こりずにどんどんでようね？！

事務局からの報告　　外出先　竹生島！（９３年８月号より）

滋賀県の琵琶湖に浮かぶ竹生島への外出。竹生島には浜大津から出る船に乗っていくのですが、船は朝の１０時半だけでそれに乗り遅れれば島にたどり着くことができない。二人の介助者は朝８時前に施設に迎えに行ってもらいましたが、ぎりぎりで間に合ったそうです。外出されたＨさんは琵琶湖近辺にかつて住んでいたことがあるそうで、とても喜んでおられました。本当にお疲れ様でした。

●体験教室の報告

体験教室の趣旨文（９２年６月号から）

集団生活が優先されるため、何かと規則が多くて、しかも、職員の手が足りない今の施設生活では味わえない生活や体験できないことを、施設障害者がどんどん味わい体験していく場として、体験教室はスタートしました。

一杯のカレーライス（体験教室参加介助者の感想から）

特に、僕は考えてしまう、これらの経験はその場だけで終わってしまうのではないかと。そんなむなしさを感じさせるだけのものではないかと・・・。

一杯のカレーライスは、僕に語りかける、介護というのはある面では、何か答えを求めるということではなく、まずは、障害者の圧倒的な経験の不足を、一つでも二つでも埋めてあげることではないか。たとえ、それで終わってしまったとしても、経験させてあげることが大切なのではないかと・・・。なんとなくそんなことを、この一杯のカレーライスは僕に教えているような気がした。

●「泊まろう会」へのご招待（８月体験教室ご案内）

９２年８月から、体験教室の一環として、「泊まろう会」を企画。

「泊まろう会」への呼びかけ文

施設では、食事・風呂・自由時間など集団生活の中で様々な制約があろうかと思います。今回の体験では、こうした制約を可能な限り排除し、個人の意思に基づく生活を体験してもらおうと思います。

今後、外出サービスでも施設障害者の自立へむけ、泊まりもできる介助者を増やしていかなければなりません。今回参加できない人も介助者を増やしていくことで全員の参加を実現していきたいと思います。

昼間・そして夜、貴方はどう過ごしますか？　街へでますか？　カラオケ？　みんなと　会食？　それとも・・・・？

FKさんの泊まろう会参加感想（抜粋）９３年１１月号　第２９号より

自分なりに総括らしきものを考えてみようと思う。一番言いたい事、本当に参加して良かったと思う。多少の不安や不満もあったけど、全体に楽しく過ごすことが出来た。僕にとって、重度障害になり、初めての所で宿泊する事自体が、大きな冒険であったと思う。両親に相談をしたら、きっと「人の手を借りて何も泊めてもらう必要もないだろう」と意見されたと思う。だが、目に見えない物、文字によって表せない物が、ボランティアの手によって伝わってきた。その証拠に施設に帰ってきて、周りがそれまで経験していない程、すごく新鮮な感じがした。あの新鮮さは、どこから生まれてきたのだろう。

最後に「泊まろう会」を企画、運営してもらった事務局の人達、僕を手助けしてくれた天理教の若者、そして介助者のみんなに感謝の気持ちをこめて「ありがとう」。

●ウィル作業所紹介

５月におひろめ式を開催。改造費用は約６００万円。ウィル作業所を使用して、外出サービス事務局機能、事務局障害者の生活作り（夕食作りや入浴介護）、泊まろう会等を開催した。※作業所建設カンパを募ったところ 1,283,310 円集まりました。

大阪市内に、また一つ、作業所がオープンしました　（９２年４月　第１１号より）

いよいよ大阪の長居に「ウィル作業所」が４月に移転・改造に着手しました。この作業所は外出サービスと障害者・就職と職場の懇談会が共同で力を合わせ、作り上げた作業所です。そこでの主な仕事内容は、外出サービスの委託事業が中心になっていますが、作業所独自の活動もこれから行っていこうと思います。また、作業所では障害者の方が宿泊訓練ができる障害者用トイレ・スロープ・広い台所や風呂などのスペースを確保しました。この設備の充実により、障害者の自立体験や介助体験などを、当事者の障害者や介助者の方にも体験していただける場所となると思います。なお、お近くにお越しの節は、ぜひ、お立ち寄り下さいますよう、よろしくお願いいたします。

●グループホームほんわか

グループホーム建設の方向性を明確にしたのは、９４年４月第３３号だった。

グループホームを目指す理由

１．多様化する障害者の要望に応える道筋の提起
２．障害者の活動と切り離すことができない「生活作り」の基盤
３．「生活づくり」を通じてよりトータルな障害者のあり方の追求
４．外出サービス会員以外の障害者も利用できる制度基盤作り
５．グループホーム制度を獲得し、活動基盤の拡大・充実を

施設入所者の外出取り組みを行っていた当法人が、グループホームを設立したのが９５年だった。様々な話し合いが行われ、カンパを募り、家具を募り、物件が決まり、名前が決まり、スタートするまでの足跡が、通信にはしっかりと刻まれていた。

グループホームの物件が決まりました　（９５年３月　第４３号より）

いろんなもん　ちょーだい！

JR阪和線杉本町駅から徒歩５分ぐらいのところです。
家は２階建ての１軒家で、１階に６畳、４．５畳、４畳と１０畳程度のLDKと風呂、トイレが二つ、２階に１０畳の部屋と物干し台があり、建坪は２０坪程度の物件です。この物件に階段昇降機を付けたり、お風呂を使いやすいようにスペースを広げたりなどの改造をしていく予定です。見取り図ができたらまた改めて通信に載せます。

グループホーム　「ほんわか」がスタートしました　（９５年４月　第４４号より）

引き続き、グループホームでの泊まり介助（女性）や食事作りなどの生活介護にご協力お願いします。
これまでの体験入居期間中で、入居障害者の生活パターンなどを話し合ってきました。泊まり介護・夕から夜にかけての介護者がまだまだ足りない現状です。また、ライフ・ネットワークでは、女性専従職員も募集しています。協力していただける方は事務所までご連絡・お問い合わせください。

●まいど新鮮便創刊号発刊

自立生活センター自立生活センター MY-DO ～まいど～は、９８年５月に金満里氏を招聘して設立集会を開催、９９年４月に新事務所のお披露目会を開催。１０月より「市町村障害者生活支援事業」の委託を受ける。それに伴い、まいど新鮮便を定期発刊し、「施設らくがき帳」の中に挟み込み配布した。まいど新鮮便は、２０１１年７月号まで発刊。

皆さん、はじめまして！　（９８年３月　第７６号　新鮮便後記より）

自立生活センター自立生活センター MY-DO ～まいど～の通信の創刊号をお届けします。自立生活センター自立生活センター MY-DO ～まいど～では、地域の障害者の生活をよりその人らしく、豊かに広げていくお手伝いをしていきたいと思っています。その活動内容は、同じ障害者が相談に乗ったりアドバイスをしたりするピア・カウンセリングや、より良い自立生活のノウハウを見つけるための自立生活プログラムなどをどんどんやっていく予定です。

今後、住吉区内を中心にあっちこっちへ、「まいど！」と言って出没するかも知れません。末永くおつきあいをお願いします。

●劇団”態変”「壺中祭」へ参加

９９年３月に上記公演に施設入所者がエキストラとして出演させてもらった。以下は、その時の記事。

劇団”態変”の公演は満員御礼にて無事終了　（９９年６月　８４号より）

～エキストラの皆さん介助者や施設の方々本当におつかれさま！～

・・・１月のオーデションには、２１名の障害者がエントリーした。

そして、１２名の合格者。この数かなりすごい！全体のオーデション数６７名全体の合格者数３２名。施設って芸術的に一番縁遠い所に位置しているようだけど、それだけ磨けば光るダイヤの原石がたくさんあったのだ。いや、いらっしゃった。そして劇団の方も言っておられたように、施設はすごい人達のるつぼであると・・・納得。

２月稽古、そして３月１１日から１４日の本番では１１名のエキストラが日替わりで出演。見事に自分の身体でもって美を表現。そして、劇団の公演は大反響満員御礼にて無事終了。・・・

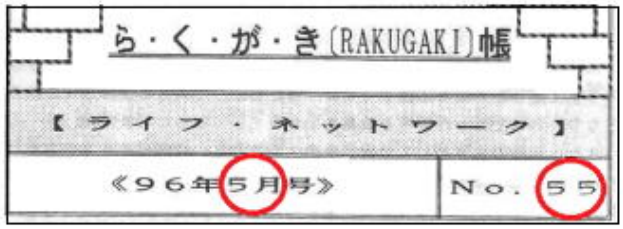
●通信５５号が二つ！？

編集ミスにより、９６年４月・５月号が、共に５５号に。

６月号は５７号に訂正したものの、５６号は幻の存在となってしまった。

９６年４月発行　５５号

９６年５月発行　５５号(！？)



●ポケベルから携帯へ

PHSと携帯電話の普及が始まった９６年、連絡手段をポケベルから携帯電話へ切り替えるお知らせが掲載された。３年前には『ポケベルが鳴らなくて』がヒットしていた事を思うと、時代の移り変わりを感じます。

【携帯電話の導入について】　（９６年４月　第５５号より）

これまで外出介護当日の事務局との連絡手段としてポケベルを利用してきました。これは介護者が事務所の留守番電話に用件を吹き込んで、そればポケベルに転送されて、その用件を電話で外から聞きというものでしたが、「連絡に手間がかかる」「近くにプッシュホンがなければ用件を聞けない」など、いろいろと不便がありました。ちょうど今回、携帯電話（関西デジタルホン）が安く手に入りましたので、４月以降はポケベルを廃止して携帯電話を使うことにしました。ご理解頂き、以下ご協力をよろしくお願いします。

●あいえるのマスコットキャラクター！？

あいえるでは、犬を飼っていた事もあった。
きっかけは、福祉ホームあいえる(現グループホーム・あいえる)を建設する際に、その空き地に住み着いていた野良犬の生活を保障するため。
通信でも度々取り上げ、読者を癒してくれた。

０３年１月発行　１０５号より

ライフ・ネットワークでは、１１月の終わりよりワンちゃんを飼うことになりました。人間の歳になおすと６５歳！！名前は太郎（でも性別は女性！）。ちょと（？）首周りの毛が抜けてて、初めて見る方は笑ってしまうかも（御免！）しれませんが、とてもかわいい犬です♪いつもは作業所の隣の大家さんちにいます。みなさん遊びに来てくださいね～。

０３年１１月発行　１１０号より

■太郎(女の子)が帰ってきた♪■
2ヶ月ぶりに、福祉ホームから作業所へ帰ってきた太郎♪